

全盛廓鑑

山井藏

類種番號

1876

明治花街

全盛廓鑑序

花柳醉史與夢亭如蝶子相善矣。遨遊花街有年于此。

詳知其情味。尤極風流。有得於懷。示諸同好。未嘗取一

己之快也。適邂逅蝶子於某樓。飲酒樂甚矣。出一冊子。

請余刪定。披而閱之。事係花街者。分篇類聚。能鑿其穴。

遊客必讀之書也。醉史戲曰。不偏之謂通。不易之謂情。

通者天下之正道。情者天下之定理。此篇乃江門現時

真趣。蝶子恐其久而遺也。故筆之於書。以分同志。其書

始言起原。中轉為景况。末復總為內幕。繙之則涉六鄉。

日吉原日根津日品川ヨメバコレナスナハナガライル
日新宿日千住日板橋讀之則坐入於興其味無窮皆

實驗也。能遊者玩索而有得焉。終身用之。有不能盡者。

矣。因題稱全盛廓鑑可乎。蝶子微笑而去。余留連忘歸。

遂謫於行燈房。假妓之脂毫。手刪既了。並弁諸卷首。此

以爲序。

明治十二年六月

花柳樓主人醉狂史



全盛廓鑑小引

孔明が八陣に象どり雲雨巫山の源を築き建たる芳原の八

ツの街を道中に踏出す足も八文字臺傘立傘大門の四角張

ツたる一方の木戸さへ今は開明の世は八街を行通ふ野暮

な客も粹と化し春は櫻に全盛の花をくらぶる賑ひは有

頂天地の仙屈なり四季の遊もいろくま廓の内幕うちあけ

て張りど意氣地を見透しの玻璃障子に隈もなく古今の沿

革風俗のみぬ世の事をかもいれて里んすざんすの言葉さ

へ愚痴をいはれしきぬくの耳も残れる夢のあと爰に現

在名妓の實傳ろの口ずさむ和歌俳句風流雅事を専らふ藝

妓舞兒の手振をも粹な游子の心得草一覽あらば此里に遊
ばぬとても遊びぬる心地を寫す著者の妙案趣向は追々六
境の花と柳の品さだめ廓の鑑あきらかに不夜城中の眞景
は龍動巴里の繁華にもまされる色を染とけてまたのどげ
んとあつゝにまづ筆採りて序めかしと

明治十二の夏拓榴紅裙の奥もかゝく枇杷の實小判の色
このもしき日雙雪隠も樂書す
醉生夢史

○夢亭うしのものせられしをことふきて
もろ人もあか全盛とはむるらん
某樓内
よくうつゝたる廓かゝみを
花あふき

自序

七年の夜雨は錦城の繁華を證すと實に東洋の都會繡織なす於膝下
大臣參議農工商猫狐や鯨鱈も時と得て愛度昭代の擊壤鼓腹一千余の
町並と連て賑ふ青樓は廓別て六の廓小塚原は春の觀花に夏の夜は俄
踊の賑ひて秋は燈籠物凄く消ぬ名譽の玉菊は冬の三月の霜枯に雪も
もめけぬ寒菊の咲てい萎み亦開く環の端のなき如く入來る客もつか
ぬ間と短に夜半の長嘶し濕て嬉しぬ梅雨のふられて濕ぬ果報者寐て
待ち起てきぬくの本意なき鐘に突出され實にも肩臂の汗をなす田町
を走る人力車響も高き吉原や衣紋繕ふ衣紋坂堤もイみ見返りの柳樓
の仲の町花の江戸町京町や互に愚痴が感トてか背合の八巷に三丁目
なき五丁町松の大夫の常盤色變りぬ廓の賑ひに晝寐て夜の根津の廓
赤き心を明し合ふ紅葉番所の濕事も戀の港の品川や瀛車が載せ來る

情郎に涙を藏す袖ヶ浦桔梗の紋の新宿は婀娜に染りー白糸のなんと
 千住の河竹や浮れて沈む戀ヶ淵深き情をかけられて渡るもほんにい。
 たとしさろの種くのことゝもを三本足ぬ猴智恵に田樂焼んと手を焼
 くも酒屋の猫の手前味噌酸も甘いも酌分けし通な遊子にひれ伏して
 質さんとする心意氣まづい發兌の始めから次編の發兌や三編と著す
 文の言の葉の段々梯子上りつめ廓鑑の名にし合ふ六の郷なる景況を
 こゝに寫て移る世の形見を不朽に傳んと編者の穴賢ほどの好にころ
 あらめ

己卯の年亥はらーさ菖蒲咲月三ッ蒲團の上で先づ筆卸しに一ッ本書
 くの如し

夢亭如蝶



全盛廓鑑第一編

武陽 常陽

花柳醉史刪定
夢亭如蝶戲著

○遊女の淵源起因

抑も本朝遊女の起源を尋ぬるに今を距ると千餘年前人皇
四十五代聖武帝の御宇(天平神龜)より發りしものにして萬葉
集に「さどびとのみるめはづかしさぶるこに」とあり佐夫流
子とい遊行婦女といふとなりされば此比より遊行女あり
し例にて是即ち白拍子遊女の流をなりとす亦人皇七十四
代鳥羽帝の御代に當り洛陽に島の千歳和歌の舞とて二
人の白拍子あり共に双びなき風姿にして歌舞音曲を營業
とせるものありこれ古の遊女と稱しものにて今時の如く

只管ひたすらに淫いんをのみ鬻ひさぐものにあらずして或ある時ときの貴顯やんごんき館やかたへ
 招まねがを宴席えんせきに侍はべりて今様いまやうの朗詠うたなどを謠うたひ興きようを添そるもの
 よしありて恰あたかも近世ちんせの上等藝妓じやうとうげいぎ又また彷彿さへたり其中最そのうちも著名あだか
 きは清盛きよもりに愛あいせられし祇王妓女ぎわうぎよ、重衡しげひらが千壽宗盛せんじゆなもりが熊野義
 經つねの靜祐成しづけありが大磯おほいその虎とら、忝かたじけなくも後鳥羽院ごとほゐんの寵遇ちやうぐう深かかり
 し龜菊かめぎくあど悉ことごとく白拍子ちやくしやくしの遊女いうぢよにして各々おの／＼志操しそ秀ひいで遊藝いうげいの
 勿論もちろん和歌手蹟わかしゆせきも拙つたかからず今いまも人々ひと／＼唱繼やぶぎて教科けくわの一端はしと
 あれるもの多おほし斯かくて亦延元またけんげん以來いらい四方よもに弓箭ゆみやを弄あそびて世よの
 中なかの麻あさの如ごとく亂みだれるも隨したがひ白拍子ちやくしやくしの業わざの廢しなれ歌舞朗詠かぶらうえいも
 絶たへくに遊女ぢよの専もつぱら淫いんをのみ販うり無下むげに卑いやしき者ものとなり也
 き休戦きうせんの陣中ちんちゆうも食物しよくもつ杯商あきかふを名なとして淫賣いんばいするもの多おほか
 りしと然されども只白拍子ちやくしやくしのみ斯かる所業しわさのありしよのあら

(俗風の迄日今りよ時昔女遊)



ざるべし案ずるに四民戦ひも打ち悩まれ飢渴に迫るを以て卑しき業とい知りながゝ近世の提重私窩の類も等しく淫風を布きしあるべし而して世の治りし後も猶一般の習慣といなり遂に制し難き勢ひに至りたるなり夫より天正十七年原三郎左衛門林又一郎といへる兩人の浪士公許を得京都萬里小路柳の馬場に一の傾城廓を開けりこれ今の島原にして廓を結び始めなり是より漸次各地も延蔓り娼家の繁昌夥多く一種の家業を起したるが天正の比まで今日の如き卑賤品行にあらずして白拍子の風儀自ら存り京都江戸の傾城の各小舞亂舞和歌或は茶湯など嗜みたりば祝筵又は不時の催し等にはろれく貴顯き館に召され慰みにせられしかども餘りにわろびれても見ゆるとな

かゞしがいつとなく風俗劣りていたあくなきとされ
 無二の卑き品姿にもあらざりしと見ゆ其後吉原開設以
 來世は泰く治まり倍々潤色するに随ひ廓も共に賑ひて一
 層繁榮して全盛の妓女出で廓中の一孤孤立の法を定め奇
 異なる趣きを現ひ姉妓雛妓に至るまで白拍子も擬せし
 ものにや所業の卑しきに引替へて萬事上品を専らとし茶
 湯、倭歌、俳諧、插花、碁、將碁、琴、三絃等に至るまで師を撰びて稽
 古し百般に技藝を亘りたるを全盛酋妓の稱へありて高官
 の館客も爰に通ひ今も其名ある高尾、薄雲の如き名妓出て
 威を具へしより傾城とさへ謂へ大層なるもの、様に言
 業さへ驕慢て方今俗に娼妓をさしておいらいふも
 いらいがと言を驕りしより自然なおいらいと轉せしなり嬉

遊笑覽に曰く、おい、らんは姉女郎を云ふ義にして始め、おい、らんがと言、漸々の廓訛よておい、らんと反、あらんと其本語の已們がなり、雛妓の姉妓を敬て稱へしを採り、一般に娼妓の稱呼となりぬ、これ俗言自然に轉トて、少く舊稱を存するの亦、昔日を見るより、一興あり、皇政一變し、明治五年十月二日に至り、賢くも政府より令ありて、娼妓藝妓の年期を解かれ、娼家の苦使を免かる、これを解放と云ふ、後ち娼妓とならんことを請ふ者の、新たに規則を設けて、其望みに任せられたれば、數百年束縛されし身も一時に不羈の身となり、廓を出で、始めて人間社會の清冷き空氣に呼吸へらる、に至り、廓の形勢自ら一變し、娼家の貸座舗と改稱り、妓は其樓より出稼ぐが故に、出稼娼妓とと号けら

れ昔^{むかし}日に變^{かは}り自由^{じゆう}の身^みとなさしめらるゝ天恩^{てんおん}の忝^{かたじけな}きも猶^{なほ}あま^ありあり

○吉原^{よしはら}の開廓^{くわいがく}並^{なら}に沿革^{くわんげい}

吉原^{よしはら}の開^{ひら}けしは最古^{さいこ}くして今^{いま}を距^{さる}と三百餘^{さんひゃくご}年前^{ねんぜん}文錄^{ぶんろく}慶長^{けいちやう}

の比^ひ江戸^{えど}の繁昌^{はんじやう}を慕^{した}ふて娼家^{しやうか}連^{しき}りよ各地^{かくち}より移住^{うつす}りたる

が始^{はじめ}にて此^{この}比^{ころ}の定^{さだ}りたる廓^{くわく}とてはなく麴^{かうじまち}町^{まち}、鎌倉^{かまくら}、河岸^{がし}、京橋^{きやうばし}

大橋^{おほはし}の内柳町^{うちやなぎやう}、其他^{その他}處々^{しよしよ}に散在^{さんざい}して廓^{くわく}を結^{むす}ぶ程^{ほど}にはあらざ

りしが慶長^{けいちやう}十七年^{ねん}に相州^{さがみ}小田原^{おだはら}の産^{さん}なる庄司^{しやうじ}甚^{じん}左衛門^{さゑもん}幼

名^{めい}甚^{じん}内^{ない}のものと北條^{ほつでう}家の臣^{けのしん}たりしが江戸^{えど}に昇^{のぼ}りて傾城^{けいせい}町^{まち}を

一廓^{ひとくわく}にせんと徳川^{とくがわ}幕府^{ばくふ}に願^{ねが}ひいでければ當時^{そのとき}の町奉^{まちほう}行米^{ぎやうまい}

津某^{つかに}一の扱^{あつ}かひにて元和^{げんわ}三年^{ねん}三月^{ごわつ}にいたりて庄司^{しやうじ}を遊女^{いうぢよ}

町の惣名主^{そうかぬし}と一五ヶ條^{いごかう}の法書^{はふしよ}下^{くだ}りて萱屋^{ふきや}町の末^{すへ}に二町四

方はうのすゑ後沼ぬまを下くだし賜たまはりしに同年どうねん夏あつ比ころより地ち繕どりして翌年よくねん十
一ぐわつ月ふ普しん請めい成めいり所しよ々くのしやう娼家か此こ所しよより移うつりて廓くわくを結むすび舗みせを開ひらき
商しやう賣ばいせりと云い故ゆゑに後すゑ原はらと唱となふこれ元もと吉よし原はらの起おこりにして后のち
祝しやくして吉よし原はらと改あらた稱なむ街あまた衢た端い正しく幾いく筋ぢんにも別わかれ家い居あ各おの々く美う
々くしく江に戸ど町ちやう、京きやう町まち、角かく町まち、本ほん町まち、伏ふし見み町ちやう、ささかかい町まち、大おほ坂さか町まち、新しん町ちやうな
ど、稱なづ号ごうけたり江に戸ど町ちやうとは江え戸どの繁はん昌じやうの餘よ慶けいを得えて此この廓まが
も次し第だいに繁さか榮はる様やうにとて江に戸ど町ちやうと名なづ付けたり此この町まちは元もと皆みな江え
戸どの娼しやう家かにて大おほ橋はしの内うち柳やなぎ町ちやうに在ありてが慶けい長ちやう十じふ年ねん城しやう廓わくの
修しゆ繕せんの時とき用よう地ちに召めし上あられ娼しやう家かと共ともに悉ことごとく元もと誓せい願ぐわん寺じ前まへ今いまの
町まちに移うつりて亦また江に戸ど町ちやう一いち丁てい目めへ移うつる大おほ橋はしは今いまの常とこ盤ばん橋はしの舊ふる
名なにして柳やなぎ町ちやうは道だう三さん河が岸しの邊へんなり江に戸ど町ちやう二に丁てい目めは鎌かま倉くら河が
岸し及および駿そん河が府ふ中ちうより移うつる者ものなり京きやう町まちは京きやう都と六ろく條ちやうより出いで

娼家にして麴町より再び轉ると以てかくは稱号けたる
なり全二丁目は大坂瓢箪町奈良木辻なぞ云處より移り來
りて一二年遅く町造す角町は京橋角町炭町より移る故に
此名あり此町は開廓以來七八年遅く普請すまた廓内に能
狂言歌舞妓其他種々の遊戲ありて賑ふと甚だしく亦都下
の繁昌も年よ月に盛んよして立錐の餘地なきに至りしか
バ明暦二年十月九日幕府令して吉原町の地を換られ日本
堤の邊り千束村に一万四千三百餘坪を下し賜ひ移轉入費
として小間割十五金宛即ち一万五千金を與られたるが同
三年正月未換地の普請落成ざるに本郷本妙寺の失火にて
都下悉く焼失し廓中も甕一枚を餘さず類焼しける因て本
所彌勒寺の舊地は未だ荒蕪たる野原にして人跡至て少き

故假宅を命ぜらるこれ假宅の始めなりとぞ同年八月に至り換地の普請成りて此ふ舗を開き娼家巷ふ別れこゝにて聲價彌々高く繁昌の基をなすこれ今の吉原の始ふして其比の町名は江戸町、角町、京町、新町、けん藏主町、揚屋町これなり揚屋町は元吉原にありし時揚屋所々に散在するを以て新たに一町を設け揚屋軒を並べ實は花街と稱するも憚ざる程の景勢に至りたり寛文八年三月二ツの新道を開き堀町、伏見町と号く其後百般の沿革あり延寶四年十一月江戸町二丁目より失火して本所中の郷迄延焼す此時三谷、箕輪邊に假宅を許されて經紀せりこれより次乃に世と共に變りて近き比も數度類焼して深川、淺草山の宿、三谷、箕輪邊へ假宅せしと度々にて又島原へ假宅せしともあり而して解

(新吉原の古圖)

きぬの
情を
うら
今お
は
け
の
ま

千鶴庵
三陀羅法師



放の時^{はさ}はさしも賑^{にぎ}之^のしかりし廓^{くわく}中^{ちゆう}も寂^{さむ}寥^{りやう}と一^{いつ}夜^やに化^{あだ}
野^のの狐^{きつね}狸^にの偶^ぐ居^きとも疑^{うたが}ふ斗^{ばか}りなりしが再^{また}び妓^ぎ輩^{はい}廓^{くわく}へ歸^{かへ}り
て以^い前^{ぜん}にも劣^{せう}らぬ賑^{にぎ}とはなり^にける然^{しか}るに明^{めい}治^ち八^{はち}年^{ねん}十二^{じふに}
月^{ぐふつ}佐^さの槌^づ樓^{ろう}より出^い火^{くわ}して廓^{くわく}内^{ない}一^{いつ}夕^{せき}に焼^う亡^{うせ}たれば淺^{あさ}草^{くさ}山^{やま}の
宿^{しゆく}へ立^た退^{のく}もあり或^{あるひ}は深^{かみ}川^{がわ}富^{とみ}岡^{おか}に假^{かり}宅^{たく}を願^{ねが}ひ商^{しやう}賣^うせるもあ
りしが同^{おな}十^{じふ}年^{ねん}の春^{はる}に至^{いた}り追^{おひ}へ故^{もと}地^ちへ戻^{もど}りて再^{また}び舊^{その}址^{あと}を繕^{つくろ}
ひ廓^{くわく}中^{ちゆう}を五^かヶ町^{ちやう}に區^く別^{べつ}し即^{すなは}ち伏^{ふし}見^み町^{ちやう}、江^え戸^こ町^{ちやう}、揚^{あけ}屋^や町^{ちやう}、角^{かく}町^{ちやう}、京^{きやう}
町^{ちやう}とす日^に本^{ほん}堤^{づみ}より大^{おほ}門^{もん}まで三^{さん}曲^{きよく}にして凡^{およ}ろ五^ご十^{じふ}間^{けん}あり故^ゆ
に里^り俗^{ぞく}五^ご十^{じふ}間^{けん}といひ堤^{どて}より降^{くだ}る坂^{さか}を衣^い紋^{もん}坂^{さか}といふ諸^{しよ}客^{かく}衣^え
紋^{もん}と整^{つとろ}ひ廓^{くわく}へ入^いるの意^いなるべしまた坂^{さか}の南^{みなみ}側^{がわ}に柳^{やなぎ}ありさ
ぬくの別^{わか}れ路^ち必^{かなら}ず跡^{あと}を顧^{みかへ}らざるものなき故^{ゆゑ}見^み返^{かへり}柳^{やなぎ}と命^{めい}く
坂^{さか}を降^{くだ}り右^{みぎ}側^{がわ}に逢^{あひ}和^わ櫻^{えい}、駒^{こま}繫^{けい}松^{まつ}、旅^{たび}人^{びと}の井^い等^{どう}と云^{いふ}あり大^{おほ}門^{もん}内^{うち}

の通りを仲の町といふ僅かに三町に充らずして其極を水道尻と稱す廓内水樋の止なり焼亡前は茲より秋葉山を安置し開基庄司の亡靈を弔はんがため燈籠を點したれども今は取り拂ひてあらざれど斯る里の繁昌するは實に大平の餘澤とこそ申すべけれ

○新吉原の現況 第一回

新吉原の六境中最魁にして涎と流す丑の方に當る故に北廓又北里と稱す黒助兵衛と庄司甚助の創造る所なるが地勢の陰に属して寶貝の如く凹み内に紅粉の氣盈て鉄漿濠四方を圍ひ三面に田あり二面目に北を裏田圃南の三回本馴染互の胸の中田圃大門口を首となし五橋の通ひ路四方より集ふの七福大盡連續てあとに戀の餓鬼勃起連の焼け

腹はらの背せに換かへられぬ小格子こごうしよ一寸ちよんと三口みくちのとね橋はしより田たん
 圃おの蝨いふこみ見たやうみとヒョいと飛とび込こんで出いてての股また入いる朝あさな夕ゆふ
 穴あな忙いそがしや穴あな参まゐり廊中くわくちゆう八街やつのちまたの細見さいけんの圖中づちゆうに詳つまびらかなれど
 も今いま其そのあらしを記しるさんに土堤どてよりついく衣紋えもん坂さか見返みかへり
 柳やなぎ三曲さんきよくに軒のきを並ならぶ五拾間ごじっけん先まづ大門おほもんの一條ひとをちの通つうと粹さいとの
 仲なかの町ちやう水道すいどう尻じりの其止そのとどり直なぐに左ひだりの一條ひとをちの爺ぢやうむさい伏見町ふしみちやうと
 て空穴からつけつの遊あそぶ所ところなり又また其先そのさきの横條よこぢの右みぎを江戸町えどちやう一丁目ちやうめ左
 を同おな二丁目ちやうめと唱となへり其先そのさきの右みぎの條ぢやう誰たが名なを爰こゝに揚屋町あげやちやう左
 の檢査けんさの角町すみやうにて又また其先そのさきの京町きやうまちに古猫ふるねこの住すむ一丁目ちやうめ白助しろすけ
 稻荷いかりの祠ほころありて鼻下はな長連ちやうれんを誑たぶらかすこと蓋けだし此町このまちを一等どうとす
 左ひだりの二丁目ちやうめ其他その他北きたの濠ゐづに沿そふと西河岸にしがし二朱にしゆにて遊あそび一處ところ
 とす南みなみを惡河わるが岸しと云い此兩河岸このりやうがしに游あそぶ客きやくの犢鼻褌ふんどしに包つみ「

楮幣と共に穢なく鉄炮寸間の雲雨をなす其他長屋周見世
 あり廓鑑を讀ざる細見薄學者の棒茶屋に擔ぎ込れて鶴の
 卵を喰ひ朝勘定に驚きて鴻の音も出ず御尼介ながら三尺
 棒に引掛り一朝に出世して始末屋の馬車にて歸るこれを
 附有魔と云昔一の淺州御門より吉原大門まで通ふ白き飾
 りの馬に驚者二人小室節謠ふに二百四十八銅とかよ又舟
 かくの土堤馬ありたれど今の附馬下馬の襪縷のみ残れり
 又棒茶屋にも種々の穴ありて特別通客の車夫と腹を合せ
 て浮端の遊びをなし又繩付の人力車でいろがして中引十夜
 二前の游興をなすお店者の床に車と乗込で分時を争ひ佳
 境短く人力には増賃をねだられ娼妓に無心を云る、鼻毛
 長連の淺州寺の鐘と聴わけてオツウ通人ぶり髡客の頭の

銅貨の地金色に光り昔日把たる杵と振廻し却て薄遇れ粹客の道戯の幫間末社の鼻を捻り浮薄の廓の習慣とて大引

二時 過油蟲の隊長即ち阿夫の露の情に因て居續の日には

配妓が着換をも打殺し屏風の内に溜息するも最憎く又病

院の検査醫も丘惚するは磯の鮑の癡思ひにぞあふんか

○俄踊の起因

往古俄踊てふものゝ神佛の祭典などの時不意に催しにて

踊り行きたるより起りしもの故かくはいひあへりさて俄

踊の起るゝ京都祇園の祭典また島原住吉の祭りの煉物な

どと學べるにや享保十九年八月九郎助稻荷に正一位を賜

はしし時に起れど古き書に見へたりされども年々打續

きて興行せしにあらざ近比まで俄踊ある中へ大門口に葉

附の竹二本を左右に立て、注連縄引とへてありが今は
斯るともあらざりいとなんこれら古今の沿革なり其他の
文にも種々の説記せり享保の後明和に至りて毎年九郎助
稻荷の祭典又は晝八時比より吉原にて俄踊といふて廊中
の藝人ども様々の踊りをなして煉り行くと流行れりなぞ
、あきば俄踊の始まり明和十年の比より發り安永年間に
盛んに流行はれ夜間の興行になりてより藝妓幫間あどが
一層盡力し目新らしく耳珍らしき工風を凝らし客を招く
具とはなりぬこの餘風各里に傳染りて互に工拙を競ふ程
になりたるは最とも優しくありける
○燈籠の説并玉菊の傳
七月燈籠を點すはもと玉菊といふ遊女の追善に起りて猶

年と移り物と變り美麗と盡すに至れるなりさて此玉菊は
角町中萬字屋の遊女もて琴三絃を善し殊に河東節の淨瑠
璃を好みて弄び其志操も優しく常は目下の者を憫み仁慈
の心厚さを以て遂も名妓の名を得たるも哀むべし享保十
一年三月二十九日二十五歳を一期として冥土の客となり
しかばろの三週忌の追善とて仲の町の茶屋へ軒毎に箱
提打といだし亡靈と慰めたりとぞ今青樓雜話に載する
圖と爰に摸寫す
斯てろの翌年より彌益盛
になりて切子燈籠また影
燈なぞ思ひくに點し連
ね年を追て潤色し今は絹地に油繪めさし繪と画き先と



争ふて皆新規と案じ各里に流行して一般に善美を存する
は追善の爲のみならず所謂客を招く俄踊と一般秋まだき
烈し暑さの夕景より納冷がてら吉原燈籠見物に出るも亦
一興なぞ、人口に膾炙せるに至りしハ亡玉菊の聲譽も亦
おもひやられける

○初會の記并見立の辨

吉原の夜舗ととるの夕暮は入合の鏡に花や咲らんとされ
バ賣物に華と飾る全盛は頭に瑠璃珊瑚を輝し身に錦を纏
ふて借金が淵へ導んとす古しへはすがいきの三味線と下
足札の拍子につれてろこはかの遊君舗をはるが例なりそ
が中に「酉妓株と見へたるが烟草の煙り環を吹き格子と唄
く素見を見てみぬふりをなし」或るは銘々區々に客の噂い

ふ中なか又また獨ひとりり默もく然ぜんとして艶えん書みなと讀よみ時とき々々鼻はなの先さきで笑わらふ娼しやう
妓ぎは賓きん客かくに富かねもち者ものありて内うち々々の苦く慮ろもなく固もとより窮ひん鬼んなる
情い郎りやうもなしされば髡こげきやく客かく三さん尺しやく帶おびには目めもかけず伎ぎ倆りやうに誇ほこり
佳き客やくを儲もろくる其その術しゆ朗はかりかあり又また疲や姿がたに鼻はな筋ぢん通とほりて眼めもと清きよ
し、く器きりやう量りやうは些ちこし劣おとりたれども愛あい敬けいはこぼる、許ばかり左さい右うに唄うた
ぎ、て袖そでもて面おもてを覆おほひうつふきて晒わらひをかくし格かう子しを覘のぞく素ひや
見みを額ひたいであし、らふは是これ度ど典てんの隨い一いち機きも臨のぞみ變へんに應おうじて
客きやくをねこかす才さい智ちあり或あるは手てを懷ふところにし顔かほを衿きんにさし入い
れて無む締しだらなく折をりふし空そら目めづかひよ天てん井せいを見みる傾けい城せいのた
してもの思おもひを内うちに含くみ何なんとなく鬱うつ心しん現あらはれたり亦またのろけ
などいふて物もの騒さわがしきいはじめよりさしたる手てもなく馴お
染じひにつけ一いち圖づに客きやくを思おもふの質しちにて舗みせにありてもおのづか

ら其餘情をあらはす或あるの中座を横よこすはりて表おもての小唄人
 に髣髴きようもくするの虚氣うはきの性質せいしつ好こたる客きやくに初會しよくわいより打解うちどけかた
 り馴染なじみ金きんも自みづからしてやり或あるは文ふみなど書かきて活潑くわつせつの姿すがたある
 は果はたして薄情はくじやうの質しつよして情郎じやうらうに未練みれんなく醜男ぶをこ髣客こけきやくにとり
 ては古今ここん手取てどりの秀才しやうさいあり亦また酸漿ほうづきと鳴からしあるは待人たいじん呪のろひ
 蛙かはづを折をりあるの疊算たいみさんなどして辻占つちうらを娛たのしむなどのあどけふく
 もの數かず云いはぬ優妓やさぎにて客きやくの自由じゆうあるものなり其外そのほか端手はで
 に華麗くわいれいを嗜たしみ亦また風流ふうりうを好このむもありて筆ふでに文あやどるとも一朝一夕てうせき
 には綴つづり盡つくすべくもあらずさはさりながら柱はしらに添部そかへ屋持やもち
 も籬まきぎに嘴さへづる醜妓ふんばりも其意味そのいみの相伴あひだ客きやくの娼妓しやうぎの麗品れいひんと見立みだ
 て弄あそぶにまづ樓丁ろうてい引附座敷ひきつけざしきに請しやうず四方あたりを際さがれば床どこに旭ひろ
 日に鶴つるの大軸かけもの懸かりこゝぞ巫山ふさんの仙屈せんくつぞと思おもはる張附はりつけの天てん

(圖の鋪夜に并附引)



井の鳳凰翔て驚かど疑ひ燭檠未だ暗して四隈も足らず黒
 塗の班髭のしたる烟草盆は座頭の中座鋪の如く中央に蟠
 居す三組の盃の問でもゑる、三三九度煤灼役の引付盃に
 て與彼與誰の定言ありおめし換可謝の聲と俱に座鋪へ直
 れバ杯盤坐り火鉢の火の隣り閨房の甚助と俱に煽り臺の
 物は些少にして蟻の罌丸の如し割箸は真切と化して亦廻
 し房中の火箸に變る其忙しさと廊下に響きて駱驛たり頓
 て配妓席に附くに茶屋の者など盃を取て妓に進むるに
 斜にすはりて客に向はざるの尻にて容を扱ふの前兆なら
 ん折ふしの流し目に其情をおもはせ傍輩同志のはな一な
 どするが通例なり客は外装を飾りて盃に禮を述瀕りに烟
 草入の底と撃き床急ぎの度数家へ同遊の上古と責り萬客

幸 盛 録 卷 一 終
幫間藝妓を招け金の減と怡ど沙の如く胸は二上り三下り
彌々借金が淵へ錠と卸し得手に帆を充分にあげて合惚の
沖を越雨が蕭々に犯さる妓婢に油を採らる、廊下飛は赤
面して床にも入り度心謀あり拍手て時刻を問ふは空床擔
て鉄翠溝へ落救を乞ふが如く破旗くたり名代房に灰吹を
叩くは烟管と共に厂首と伸して來るか疲の怨あり諺又曰
武士は轡の音に眼と覺し嫖客は草履の音に狸寐入りすと
素見散ずれば遙に鍋焼温飩の節床しく按摩針の聲枕の底
に囁し忽ちつぐる東雲の夢も結ばぬ其間に明烏の阿房
くと嘲られ力落ちて閨中より這出るによよしなく顔は金
盃に映りて青くなりさぬくのお近い内の捨言葉あへなさ
別れに袖を絞るも最と憫さにこそ

○狎客の内幕

粹と成りて身と亡ぼさんより不粹となりて身と全ふせん
とは果報者の心意氣床を番する狸の金言ならんれ狎客
は阿夫の如じ女郎の花に睡りて甘き露を吸ひ梢に巢を造
らんて却て身を亡す凡る世に生るもの何れか戀を慕は
ざらんされば變る枕の稼の身とてあながち情の無きもの
ならず邂逅に同戀の心感トて好き好る、中となり充ざる
に余情ありて互に心の底を探り合ひ未た身の上を飾り氣
を兼會中ころ得も言べくもあらざる娛樂にてなど千金を
抛つも猶惜べけんと互に都合に都合しても逢たく戀の癖
者増長して情は彌々十二重の草履と俱に厚く亦族人の井
と共に深くなるに従ひ妓は客の懷を案ト客は妓の苦界を

察し祝祭日の相談も身の詰りとなり始めの波出に比例て
 疲我慢にも三度に一度は藝妓の二本も散財してお茶を濁
 さんどす該る身に成行ほど義理づくめに金の人る事は絶
 ず凡て娼妓に好る、客の永く通ひし例なく、一年か半年に
 して互ふ故障出来てされるとき何れ譯なく遠ざかり
 神がけて誓ひし言も仇となり迎も末の遂ぐべきことは稀
 にして終にはおもはぬ人に身を任せ仇なる契をかこち昔
 の夢をおもひやるは河竹の定まれる則の如しさは兼て知
 りながらも兎角に鴛鴦のおもひをこめ浮氣のみの面に及
 ばぬ戀の約束を、常に傍輩などわざと我室へ呼入れて睦
 じき様子をみせ別らるゝを樂みに思ひ客は猶さら名譽と一
 夥多問ひ通る客の内特別我には深切なりと倍々迷ふ戀れ

(圖の客狎)



路互に思に思を焦して親元または客に送る手紙を書け又
は玉帳の調べに此内幾許は主など、如狐つくも最と優な
る趣にて四季折々の配り物手拭緒口の模様まで相談し其
客の身振ものごしをよく贖る部屋持の戯もいと可笑しく後
朝の雨に居續の日は座鋪に屏風を立廻し客の姿様あしき
をかくし座鋪に締ち籠りて傍輩に逢さへ嫌ひ湯に入る隙
も惜まれて今日必ずと約束せし髪結を翌日へ延し今と呼
に來し處へも虚病を仕ひ甚だしさに至ッては他の客に顔
見さへ怠るほどにて客の減るとは此里の臘燭に似ては
なく床より起出れば火鉢の兩側に差し向ひ此時妓婢のも
のせし鍋の蓋泡をふさばつと立灰と俱に丁足の膳を直し近
江屋の細根に蓑乾の五分漬蓋茶碗に堆く隣り座鋪の送物

なご所^{ところ}せきまで併^{あひ}べ立て、客^{きやく}へ勸^{すす}む誠^{まこと}や居^ゐ續^{つづ}の遊^{あそ}樂^びは事^{こと}
足^たらずしておのづから備^{そな}はり空^{くう}しく日^ひを送^{おく}るもゑ歸^かいと
もなき戀^{こひ}の慾^{よく}一日^{いちにち}のよし二^ふ日はよしと日^ひを重^{かさ}ね倍^ま々^く御^み興^{こし}
を据^そへて歸^き路^ろを失^{うしな}ひ金^{かね}が淵^{ふち}に飄^{ひょう}泊^{はく}て末^{すえ}日^{にち}峠^{とうげ}を越^こるに苦^{くる}し
み名^め代^{だい}の客^{きやく}は怒^{おこ}りて心^{こころ}無^なの約^{やく}束^{そく}を違^{ちが}へ始^{はじ}めは最^{ひい}負^きせし茶^{ちや}
屋^やも呆^{あき}れ果^はて、客^{きやく}を送^{おく}らず妓^{しん}婢^び管^や婆^{りて}は氣^きを按^おめども聞^き
入^いれねば却^{かへ}て客^{きやく}を怨^{うら}むに至^{いた}り客^{きやく}妓^きの不^ふ都^つ合^{がふ}より廊^{くわく}外^{ぐわい}にあ
らざれば逢^あふことさへもならざる様^{よう}になり也^{なり}ければ心^{こころ}自^{おの}然^{づこ}
偏^{ひん}み管^や婆^{りて}樓^{わかい}丁^のの唄^{うた}くを氣^きにかけ此^{この}客^{きやく}が茶^{ちや}屋^やの勘^{かん}定^{ちやう}附^{づか}ざる
をかこち遂^{つひ}には客^{きやく}に着^きする寢^ね衣^{まぎ}まで曲^まげ殺^{ころ}してモ其^{その}客^{きやく}に
逢^あたく客^{きやく}の猶^{なほ}更^{さら}不^ふ都^つ合^{がふ}の事^{こと}のみ多^{おほ}く家^か業^{げう}も手^てに附^つかずお
こたりて末^{すえ}頼^{たの}母^もしき心^{こころ}かなど現^{うつ}で通^{とお}ふ夢^{ゆめ}の世^よの覺^{さめ}て甲^か斐^ひ

なき苦海の身沈みてつゞき山の井の底に墮せし簪同様あ
がらんとすれど浮む瀬なく哭て嬉しき夜もあれど笑ふて
つらきと高尾も言けん枉ても偕に老さんと思ふ念力岩を
も通す廓の耐忍のことなまば張り通すころ誠心なり然り
ながら此里の地理に精く形勢に長けてアリンズ大國博士ナ
ンザンズの門に遊び一等免狀を受んより一層果報者のド
クトルとなりて身を堅固く守方よかるべし
腐言此編は小生累年見聞實驗せるとを筆に任せ下繪と
亭齋年参に與へて淨書せしむ今茲に洩たる檢番の因源、
娼家茶屋の内幕、娼妓の棚卸し、娼藝妓並に幫間の等級表、
檢査病院、客の游方等より長屋局女郎の内幕、殘居の魂膽、
四季折々のとどもまで鯉松の臺のせて洩さず筆鹽梅の

二葉の菓子に八百文のすしの味つけて金子の料理の鮮
かに濱田の天ぶらに口をすべらかし錦鶴てんの調子に
乗て陸續出版せんとほりす
如蝶再ゑるす

全盛廓鑑第一編 畢

全盛廓鑑

第一編

全書附錄
第一編

明治十二年六月廿六日官准
同 七月一日出版

著者兼
出版人

福城駒多朗

本郷區春木町二丁目
廿四番地

東京本郷春木町二丁目

發兌元 文會堂

賣 東京芝三島町 山中市兵衛

賣 東京新吉原 仲ノ町 引手茶や湊屋

弘 全銀座二丁目 山中孝之助

全 全根津宮永町 引手茶や岩村

書 全銀座四丁目 山中喜太郎

ば 全品川步行新宿 全 大のや

肆 全新和泉町 文園堂

き 全内藤新宿 全 國田や
此他府下各書林繪艸紙店

天下英雄猿木下
絕代豪傑鬼柴田
世間別有男子在
芳原樓上醉花眠

